Ⅰアメリカのアジア戦略のルーツ

フィリピン人と西洋人の最初の戦い

信長、秀吉の生まれる前、北条早雲の頃が、コロンブスのアメリカ大陸発見である。ヨーロッパ人達は、アメリカ大陸の存在をまだ想定する事は出来ず、コロンブス自身がその地をインドの奥地と解釈していた頃である。

アフリカ大陸を廻り喜望峰からインドに向かうのではなく、大西洋を逆向きに渡ると言う発想「西廻り航路」でのインドへの航海の筈だった、アメリカ新大陸発見が 1492 年。そしてその 30 年後の 1521 年、とうとう地球は丸かった事を証明したマゼランは、彼自身の人生の終焉の地、フィリピン中部セブ州のマクタン島まで到着した。

彼達、マゼラン達はローマ法王庁から、現地人をキリスト教に改宗させると言う目的を与えられ、改宗しない現地人の奴隷化、殺害までも許されていたと言う。しかしこれは国家＝宮廷の富を増すための、香料や宝石などの奢侈品、綿織物や生糸など特産品の獲得、金銀など地下資源の収奪という目的の隠れ蓑だったともいう。

セブ島の領主らをキリスト教に改宗させて、スペイン王に従わせたマゼランだが、ムスリムの領主（ダトゥ）ラプ＝ラプはそれに従わなかった。両者は戦闘となり、ここでマゼランは戦死、これがフィリピン人と西洋人の最初の戦争だという。マゼランを討ち取ったラプ＝ラプは後に侵略者に対する抵抗の英雄とみなされ、島最大の都市ラプ＝ラプ市は彼を記念して名づけられた。

大航海時代とは西洋の命名、マゼランの船の到着から 20 数年後、極東の日本にも種子島(鉄砲)が伝来する。

①　有色人種への暴虐―アメリカ先住民（インディアン達）の受難―

コロンブスのアメリカ大陸発見（1492/10/12）からマゼランのセブ島（フィリッピン）到着（1521/04/07）までは 30 年ほど、その間アメリカ先住民族はスペイン人により絶滅の危機に落される、すさまじい暴虐の嵐に襲われていた。

マゼランの到着から 60 年後の 1541 年、国王カルロス 5 世に謁見したラス・カサス神父は、インディオの社会崩壊はスペイン人の非道な所業によるとの報告書を提出している。『インディアスの破壊についての簡潔な報告（岩波文庫)』がその報告をもとに著されているという。

コロンブスと同行、虐殺を目にしていたこのラス・サカス神父は、その日記に「一人でもイ

ンディオが森にいたら、すぐに一隊を編成し、それを追いました。スペイン人が彼らを見つけたときはいつも、柵囲いのなかの羊のように、情け容赦なく彼らを虐殺しました。」と記した。

② 新大陸（アメリカ大陸）のスペイン統治

コロンブスの新大陸発見の翌年には、さっそく発見した国々、地域の領有を巡ってポルトガル、スペインの間で支配地、領地の線引きをしている。それが教皇アレクサンデル 6 世の教皇子午線である。これにポルトガル側は不満、2 国間の交渉を開始して、1494 年にはトリデシリァス条約で修正、こうしてブラジルを除き南北アメリカ大陸に広大なスペイン領土がもたらされた。

このローマ教皇、アレクサンデル 6 世（在位 1492～1503 年）はルネッサンス期最も悪名の高いと言われるスペイン出身、本名はロドリゴ＝ボルジア。有名なチェーザレ＝ボルジアの父親である。

権謀術数と毒殺などで競争相手を倒して頭角を現したボルジア家。教皇領の統治者としての富をもち、一族を教皇庁の要職につけたり、高位の聖職者に任命したり、イタリアの各領主と取引をして領主の地位を与えたり。息子のチェーザレ＝ボルジアをヴァレンチノワ公に仕立て、娘のルクレツィアはフェラーラ公などに嫁がせている。

ローマ法王庁は絶対王権と一体的であり、先住民へのキリスト教布教の役割を与えて、改宗しない場合の奴隷化、殺戮を明文的に許可を与える権威的な存在であったろうか。

そこで善良なアメリカ先住民は「スペインの（征服者）によってその文明を破壊され、またスペイン人入植者のエンコミエンダ制による強制労働や、後にはアシエンダ制大農園やプランテーションでの過酷な労働によって急速に人口が減少した。

借金の形（カタ）、前借なのだろうが、奴隷労働を余技なくさせる訳である。もっと進化した奴隷労働が、現代のアメリカ社会の、奨学金返済から一生逃れられない若い人々ではないのだろうか。

「カリブ海域ではコロンブスの到来の頃に約 300 万人いたインディオは、その後の約 30 年で 10 万人までに減ったと推定される。アステカ王国のメキシコでは約 2500 万人だったのが、征服から 100 年後の 1625 年頃にはわずか 100 万に激減、インカ帝国の地域は約 1200 万人が約半世紀間に 5 分の 1 まで減少した」と。

人口減少が進み、銀山の採掘量も減ってきた 17 世紀には、キリスト教布教と抱き合わせで先住民を支配する「エンコミエンダ制」に代わって、入植者が大土地所有制のもとで農園を形成する「アシエンタ制」、現地人を債務奴隷として労働力とする大農園経営の形態がひろがっていったと言う。そしてアメリカ大陸にアフリカ大陸からの黒人奴隷が運ばれた。

③　スペインのフィリピン植民地化

フィリピンのロドリゴ・ドゥテルテ大統領のオバマアメリカ大統領への暴言がたびたび報道されて、この人はどんな人かと思った。しかしダバオ市長を 7 期務めた 70 才である。少数民族の彼の言葉の裏側こそが、フィリピンの人々の苦難の歴史、スペイン、アメリカ植民地支配下を生きたフィリピンの声なのかもしれない。

さて、アメリカ先住民族が絶滅に瀕するほどの暴虐の最中に、マゼランが 1521 年にフィリピンに到着し、翌年にこの地で戦死である。スペインからモルッカ（香辛列島）に大西洋側から廻るには、大西洋と太平洋という二つの大洋を横断する必要があり、また帰路は東風の貿易風に遮られて進めず、この後スペインは一時この地を放棄、1529 年のサラゴサ条約でポルトガルに譲渡している。

この時のマゼラン一行を運んだのは、メキシコから貿易風の東風に乗ってフィリピンに来たスペイン船だが、帰路は逆風となるので偏西風に乗れずに航行は困難であった。フィリピン経営にはメキシコへの安全な帰路が必要であった。（西回りのインド洋航路はポルトガルに抑えられ、利用できなかった）

そしてこの地はフィリピンという国名までもが、マゼランの 20 年後の 1542 年のレガスピ率いる遠征隊が、この地を時のスペイン皇太子（カルロス 1 世の子、後のフェリペ 2 世）の名にちなみ、フィリピンと名付けたものである。

１）レガスピ隊（スペイン）のフィリピン経営

アメリカ先住民族に対する残忍な殺戮、拷問、人間の狩猟、現地人の狩猟を楽しむという虐待の最中、1556 年に即位したスペインのフェリペ 2 世は、マゼランの 20 年後、次なるフィリピン征服に乗り出した。上記ポルトガルの西回りによるアジア到達に対抗するために、東回りで大西洋・太平洋を横断するフィリピン航路の開拓、その上でのフィリピン植民地支配を確保しようと動いた。スペインの最盛期、「日の沈まぬ国」の王である。

フェリペ 2 世は、1564 年（※日本では川中島の年）レガスピを艦隊司令官兼総督に任命、そしてこのレガスピ艦隊は 11 月にはメキシコを出発、93 日をかけて太平洋を渡って、2 月セブ島に上陸を果たした。そしてアジアで最初のスペイン人の町を築き、セブ島首長と条約を締結して正式にスペイン領としてしまう。そしてその後の植民地経営の全期間を通じて、『モロ戦争（ルソン島の先住民族、イスラム教徒との戦争）』に巻き込まれるのであっ

た。

総督レガスピはフィリピン支配の拠点として最大の島のルソン島のマニラに着目し、1570 年に艦隊を派遣して総攻撃して陥落させ、翌 1571 年６月にマニラ市に入城した。フィリピンへのスペインの植民地経営の始まりである。

２）マニラの要塞化

1572 年には、イスラム教のスールー諸島を除いて、全フィリピンがスペインの支配下となり、アウグスティヌス会、ドミニコ会、フランシスコ会、イエズス会等、ローマ・カトリック教会の様々な修道会がやってきて、聖職者たちは広大な土地所有、政治的にも大きな力を与えられた。新大陸アメリカで進めたのと同じ手法、カトリック布教と統治は一体的に進められた。

そしてスペイン人の占拠によって交易に支障をきたしていた中国人（マニラ海賊）の、スペインの排除を狙う襲来に備えて、イエズス会員のアントニオ・セデーニョの指揮でマニラの要塞化「イントラムロス」が進められ、城壁内地域が整備された。

やがて中国人は、イントラムロスの外に中国人街を築き、スペイン人と取引をする共存関係となり、(明治初頭のフィリピンの銃殺刑死したサラ・サールも中国系だった)、マニラはフィリピン人、メスティーソ（スペインとの混血)、スペイン人、中国人の混合する街となっていった。

3）ウルダネタの道

スペイン国王の援助を受けたマゼラン艦隊は太平洋を横断し、1521 年にフィリピン諸島に到達して、ヨーロッパから西廻りでアジアに到達する道を切り開いた。スペインは続けて新たな艦隊を送り出し、またスペインの植民地となったヌエバ・エスパーニャからも遠征隊を派遣したが、アジアからヌエバ・エスパーニャに戻る帰路は、なかなか発見できなかった。

そして 1565 年、この帰路に、レガスピの同僚**ウルダネダ**がレガスピの命により開拓したのがメキシコのアカプルコとマニラを結ぶ大西洋航路、《ウルダネダの道》である。

レガスピは、そのままセブ島に拠点を置いてフィリピン諸島の征服に着手したが、ウルダネタは 6 月にセブ島を出帆し、帰路開拓に向った。彼はこの時「メキシコ帰還航路の発見を申し出て、大胆にも高緯度海域まで航行し、大きな北よりの弧を描きつつ（大圏航路をとって）太平洋を横断してこの離れ技に成功を収めたのだが、彼は少なくとも北緯42° まで行って《貿易風》という禁止帯を回避した」という。

西航に比べれば東航は帆走に二倍の時間を要したとはいえ、10月に無事メキシコに帰還、航海が可能であることを実証した**この航路は、その後定期的に使われ、この《ウルダネタの道》を利用してメキシコに戻ることが可能になったことから、スペインのフィリピン経営が本格化したと言う。**

翌年には交易のための品物を積み込んだガレオン船がフィリピンに向けて出航し、ガレオン貿易が始まる。その後、スペイン人の本拠地としてマニラ市が建設されると、ガレオン貿易は、マニラとヌエバ・エスパーニャのアカプルコを結ぶ交易ルートとして、18世紀末まで250年間継続、繁栄して、メキシコ独立戦争（1810-1821）ナポレオン戦争（1803-1815）まで続いた。

４）ガレオン貿易

このマニラ←→アカプルコ間の定期航路はガレオン貿易といわれ、このガレオン貿易（護衛船付大型帆船団）は、年に一度スペイン王の管理下でマニラからアカプルコへ航行、陶磁器、香料、主に中国産の絹製品が積まれ、帰路は西洋の衣類、銃器類、銀で決済され（当時はボリビア高地のポトシ銀山でのインディオの酷使による豊富な銀が支えた）、年に一度の「濡れ手に粟」の商売であった。

労せずして大儲けの商売は、誰がどれだけの船上のスペースを確保できるかであり、まずは教会や聖職者達が、そして裕福なスペイン人だけがこの権利にあづかった。労せずして大儲けの商売は、「船長も乗組員もすべて個人用スペースを使って商売に励む」のだという。1593年に着任シタペデロ・デ・ロハス総督は「植民地の人間は全てアカプルコ貿易に掛かり切り、悪習に染まり、贅沢で華美な服や美食、酒に溺れている」と記している。

250年で110艘、便数が制限されていたので、可能な限り大きな船を作り、積み荷の過剰から難破も相次いだ（30艘）という。

５）エンコミエンダ制

1503年末、スペイン国王が、アメリカ大陸でのインディオのキリスト教化の義務を負わせると同時に、労働力として一定数のインディオを使役する許可を公式に与えた。ここから始まる統治形式、エンコミダエンダ制は、金銀その他の財宝の獲得に狂奔するスペイン人入植者の側が、インディオの魂の救済にはほとんど関心を寄せず、結局エンコミエンダ制は奴隷制と変わらず、1540年代にポトシ銀山が開発されると、その経営もこのエンコミエンダ制によって行われた。

エンコミエンダ制は理念はインディオ保護でも、実態は入植者がインディオを使役して富を築く隠れ蓑となった。インディオに対する過酷な使役は、その人口を激減させ、ラス＝カサスなどドミニコ派の宣教師の反対などもあって、その実態が記録されている。

※ポトシ銀山：ポトシ銀山では16世紀の半ばにエンコミエンダ制は廃止されたが、代わって導入され**ミタ労働**

もインディオにとって強制労働以外の何ものでもなかった。スペイン人がこの制度を導入した前提は、「インディオは怠惰であり働く能力に欠けている」という思い込みであり、またポトシ銀山では黒人奴隷が少なかった（存在しなかったわけではない）のは、高地で寒冷な気候が合わないという理由であった。

※ミタ労働　指定された１６地区のインディオの18歳から50歳までの男子の７分の１を、一年交替で働かせる制度。ミタ労働に就くインディオはミタヨといい、集落の長であるカシケに引率される。賃金は支給されたが食費をまかなう程度であったため、ミタヨは非番の日も労働した。またポトシ銀山までの移動費用も途中から自己負担となった。（世界史の窓）

スペインの本国にも、ペルー副王領にもエンコミエンダ労働の非人道的な実態を批判する声もあったが、ポトシ銀山で利益を上げる入植者はそれが不可欠であると主張し、彼らからの税収を財源としていた本国政府、副王政府も廃止には踏み切れなかった。

　ポトシ銀山とウアンカベリカ水銀鉱山では、ミタヨは過酷な行動での採石、粉じんの吸引、水銀の中毒などによって多くが命を落とした。ある修道士はポトシ銀山を＜地獄の入口＞、ウアンカベリカ水銀鉱山を＜インディオの墓場＞と表現し、そこで産出する銀は＜インディオの血と汗の結晶＞と表現した。アントニオ・ラ・カランチャ師は次のような言葉を残している。
（引用）精錬所で挽かれて粉になったのは鉱石ではなく、インディオの生命である。１ペソ銀貨の１枚１枚にインディオ１０人の生命がこもっている。山にこだまするたがねの音はインディオの悲鳴であり、うめき声である。
＜青木康征『南米ポトシ銀山』2000　中公新書　p.129＞　「世界史の窓」より

この手法は、新大陸アメリカと同じく、フィリピンでも行われた。支配の特徴はカトリックの強制布教と結びついている事であり、教会はマニラ総督を後ろ盾に、教区司祭を通じて聖俗の両面から原住民を支配した。フィリピン原住民の反抗は、ミンダナオ島を中心としたイスラーム教徒の抵抗（モロ戦争）がスペイン支配時代を通じて続いた。またキリスト教化した原住民の中にも、総督府と教区司祭の支配に抵抗が始まり、それは独立まで続いた。

６）　**先住民達の三重苦**

ガレオン貿易、この物流を絶やさないための労力は、先住民族（フィリピン人）の強制労働で賄われた。この手法はスペインがコンキスタドール（征服者）やアメリカ新大陸に入植した植民者に対し、インディオに対する**キリスト教の教化と保護を条件**に、その統治を委任したのと同じである。

アメリカ大陸では、委任された入植者（白人達）は、ヨーロッパから持ち込んだ小麦や、アジア原産のサトウキビなどの農作物を栽培する農園や、銀山などの鉱山を開発し、インディオを労働力として使役することが認められた**（形式的には租税を取る形をとった）。**その労働は実質的な無給の強制労働に等しかった。

フィリピンにおいても、植民地統治の何よりの弊害は、植民地経済では本国の方角を向いており、利益を生む産品だけがマニラを素通りして行くところにあった。植民地住民の食料生産よりも強制労働、輸出品、先進国市場むけの産品の中継地、であり、ヨーロッパの需要に頼り切る商品経済を押し付け、フィリピンの経済発展に興味を示さず、国民生活は強制労働と重税で疲弊しきっていった。

ウォーラーステインの「近代世界システム」論では、「世界経済」の「辺境」における労働管理の形態とされているこの形式は、東南アジア、フィリピン植民地でも同じく、カトリックの強制布教と結びつき、教会はマニラ総督を後ろ盾に、教区司祭を通じて聖俗の両面から先住民を支配した。先住民族の人々は、貢税・奴隷化・強制労働という三重苦に落ちた。

アメリカ大陸では先住民を絶滅せしたほどの残虐行為。その住民絶滅を埋め合わせるためは、アフリカの自由民であった黒人達を、海路運び込み奴隷と成してこれを埋め合わせた。この傾向は17世紀初頭から始まる欧州列強の東インド会社経営も同じであった。要塞をなして、現地の資源、綿花と鉱物資源の輸出、インドの富は現地の人々の頭上で争奪せられた。

そしてこの時に利用されるのは、現地人の間の争い、傭兵として雇われて同胞を殺戮する現地人集団、そして宗主国の利益に寄り添う先住民エリートであった。

7）カトリックの布教

さて、マゼランの世界一周、セブ島到着の4年前が1517年ルターの95か条の論題、カトリック教会には宗教改革の波が押しよせ、対抗宗教改革、カトリックの海外布教活動が始まろうとしていた。

ここでカトリックの各宗派はアメリカ先住民、そしてアジアのフィリピンの人々へ、宗教で魂を、その身を強制労働と重税をもって支配をしている。

カトリックの布教に当たっては現地の血縁的氏族的社会のリーダーの子弟の教育が、まず初められて、次第に親世代を改宗せしめるのだが、「押し付ければ改宗する」というスペイン総督の文書が残っているという。

しかしモロ族（イスラム教）とは最後まで戦闘状態が続き、スペイン船の船長ピネダが1617年に唯一の解決法として進言しているのが「国王がミンダナオ島の原住民の奴隷化に許可を与える事だ。」と。そして多様な民俗信仰からの改宗は進んだ。

支配の特徴はカトリックの強制布教と結びついている事であり、教会はマニラ総督を後ろ盾に、教区司祭を通じて聖俗の両面から原住民を支配した。とうとう人口減少が進み、17世紀にはエンコミエンダ制は衰え、代わって

入植者が大土地所有制のもとで農園を形成する形態（アシエンダ制）、債務奴隷化、前貸しの低賃金労働へと変化する。

死ぬまで足抜けできない勤め、戦前の日本では創饉の年に身売りされた東北の娘達の境遇と似ている？それがフィリピン中を覆った。

８） スペインの衰退

征服したアメリカ新大陸やフィリピンからは莫大な金銀や特産物がスペインにもたらされた。しかし一方で「宗教問題」という火種、1609 年にはスペイン全土からモリスコ（キリスト教に改宗したスラム教徒）の追放が行われたが、その多くは農民でありスペイン農業は大打撃を受け、深刻な食糧不足に陥った。

その上厳格なカトリックとして、プロテスタントにカトリックを強要するフェリペ２世の統治権を否認して対立を強めたのが、商業の要、ネーデルランド北部７州（オランダ）であり、1568 年には反乱が始まり、とうとう1581 年には北部ネーデルラント7州が独立を宣言している。

続いてドイツで起こった三十年戦争（1618～1648）ではスペインが旧教徒を支援したのに対して、オランダは新教徒を支援して出兵、このさ中にフェリペ2 世が併合していたポルトガルが独立して、スペインはフランス、そしてイギリスとの争いに入ってゆく。

なにしろフェリペ2 世は、1557 年に最初の破産宣告（国庫支払い停止宣言：バンカロータ）を始めに、在位中に 4 回のバンカロータ、自己破産をしており、国庫財政は逼迫の中、戦費を作っていたのだった。そしてイングランド私掠船によるスペイン船や入植地に対する海賊行為なども、「アマルダの海戦」を決意した要因の一つに挙げられる。

1571 年、レパントの海戦でオスマン帝国海軍を破ったスペイン無敵艦隊だが、1588 年7月、ドーヴァー海峡で苦戦した「アマルダの海戦」後、スペインはその座をイギリスに譲り、エリザベス一世のイングランドが世界の植民地経営にのりだしてくる。

9） マッカーサー将軍「10 歳以上はすべて殺すこと」

一連の戦争は、宗教戦争でもあり、アジア、インド、アメリカの銀、香辛料、綿花、その他産品と奴隷貿易の利権に係る経済戦争であり、やがてスペインの覇権は共和国として近代国民国家へと向かって脱皮を果たした国々の側、オランダ、イギリスへと移っていった。

疲弊したスペインはついに 1889 年には、裏でアメリカと取引して、アナギルトが率いるフィリピンの革命軍を騙して矢面で戦わしめ、わずか３か月で敗北、2 千万ドルでフィリピン

をアメリカへと売り渡した。

フィリピン方面のアメリカ軍最高司令官マッカーサー将軍（戦後に日本占領の最高司令官となったダグラス＝マッカーサーの父）は、1900 年に正規軍ではないゲリラは「兵士としての資格に欠け、したがって、もし捕虜となった場合、戦争における兵士の特典を享けるに値しない」と声明を行う。つまり将軍の配下、ジェイコブ＝スミス将軍は「10 歳以上はすべて殺すこと」と簡潔な命令に要約した。

つまりアメリカは、予定通りフィリピン共和国を承認せず、これに抵抗する軍隊を反乱軍として鎮圧、この米比戦争の犠牲者は、フィリピン軍の戦死者 12,000 人、アメリカ軍の戦死者 4000 人、フィリピン非戦闘員の犠牲者が 20 万人にもおよんだ。10 歳以上のフィリピン住民は処刑せよとの命令であったのだから。

10）独立派を利用、アメリカの「すばらしい小さな戦争」

さて東洋では、1898 年 5 月 1 日、デューイ提督指揮のアメリカ海軍はマニラ湾のスペイン艦隊を全滅させた。しかし陸上では拠点を持たなかったので、急遽香港に亡命していたフィリピン独立運動の指導者アギナルドをアメリカの艦船で送り届けて上陸させ、その指導によってフィリピン軍の協力態勢をとった言う形。

7 月までに陸上部隊が到着、最高司令官メリットはアギナルドに戦争後の独立を口頭で約束した上でマニラ総攻撃に協力を求めた。その一方、デューイはベルギー公使を通じてスペインのマニラ総督と秘密交渉を行っていた。スペイン総督は「スペインの名誉を守るため、見せかけの戦闘を行い、その後スペイン軍は降伏する」と約束し、その場合はフィリピン軍のマニラ進入は許されないという条件を付けたと。

1898 年 8 月 13 日、雨期の最中で土砂降りの雨の中、マニラ総攻撃が行われた。フィリピン軍は積極的に攻撃したが、いたるところでアメリカ軍に進路を妨害された。午前 11 時に戦闘は終わり、城郭都市の一角に兼ねての約束通りスペイン軍の白旗が上がった。早速市内に入ろうとしたフィリピン軍は、米軍の屈強な警備兵に阻まれた。スペイン総督からの降伏を受け入れたのはアメリカ軍最高司令官メリットだった。

「こうしてアギナルド軍は、マニラ解放の歴史的な日に、米軍の脇役に押しやられた。」と言う。 註）鈴木静夫『物語フィリピンの歴史』 p.129 中公新書 1997

11）スペインの疲弊とアメリカ＝スペイン(米西)戦争

そして先ごろ死亡のニュースが世界中を走ったカストロのキューバ、ここはその頃はコ

ロンブス以来、スペイン領として続いていた。が 1868 年に独立運動、鎮圧され、90 年代にホセ＝マルティを指導者とした独立運動が再び活発となり、1895 年 7 月に共和国として独立を宣言している。

しかしスペインの弾圧はなおも続いていたが、アメリカ国内ではキューバの砂糖資源に投資していたので、それを失うことを恐れて介入の世論が高まり、1898 年にハバナ港でアメリカの軍艦メイン号が爆沈して多数のアメリカ兵が犠牲となった事件（アメリカの謀略という説もある）を受けて、マッキンリー米大統領がスペインに宣戦布告をした。

これが、アメリカ＝スペイン（米西）戦争の始まりだが、この終結課程が不気味である。上記のようにラテンアメリカやフィリピンでのスペイン軍と戦闘の結果、たった４ヶ月でアメリカの勝利、1898 年末に講和が成立し、パリ条約でキューバの独立は承認され、アメリカはフィリピン・プエルトリコ・グアムを領有した。

これはアメリカが行った帝国主義戦争であり、これによって海外に殖民地をもつ国家として一躍世界の強国となったと。（なおこの時アメリカがキューバに上陸した地点を、戦後に永久租借とし、キューバが社会主義国となってもアメリカは返還せず、グアンタナモ基地として使用し続けている訳である。）

12)　アメリカの戦争の果実

この戦争、アメリカ側の死者は１名であった。このニュースを、多くのアメリカ人は、キューバをめぐる戦争が、なぜ遠く離れたフィリピンを舞台として戦われるのかまったくの謎だったのである。しかし、この戦略は、マッキンレー政権（1897/03/04～1901/09/14）の下で、時間をかけて練り上げられていたものであった。

マッキンレー政権にとって、スペインとの戦争は、フィリピンからスペインを駆逐し、アジア市場への拠点を築くまたとない機会だったのである。「素晴らしい小さい戦争」と呼ばれた米西戦争は、わずか三ヶ月で終了し、1898 年 12 月 10 日のパリ条約において 2 千万ドルでフィリピンを購入したアメリカ側の死者は 5000 人余り、その大多数は熱帯病の犠牲者であった。

義勇兵を率いて戦闘に参加したセオドア＝ルーズヴェルトのように、この戦争をアメリカの「男らしさ」を証明する絶好の機会として捉えた人も少なくなかった。戦争の果実も申し分なかった。

1898 年の暮れに締結されたパリ講和条約で、アメリカはスペインにキューバの独立を認め

させ、フィリピン、グアム、プエルトリコを獲得する。戦争中に併合が決議されたハワイを太平洋の十字路として、カリフォルニアからマニラを結ぶ「太平洋の架け橋」が誕生することになった。

アメリカは、一転してフィリピンの独立を認めなかったので、アギナルドは、今度はアメリカからの独立戦争を戦って、1899 年２月からフィリピン＝アメリカ戦争が開始された。しかしアメリカ軍の近代兵器に対してゲリラ戦での抵抗はついに 1901 年逮捕、独立運動は挫折した。こうしてフィリピンはアメリカの統治を受けることとなったと。

Ⅱフィリピンのアメリカ統治

① アメリカとスペイン

さて 1775/4//19 から 1783/9/3 にかけて、イギリスの植民地 13 州が、イギリス本国との独立戦争を勝ち抜き、1776 年に独立宣言を発している。1789 年に勃発したフランス革命・ブルボン絶対王政を倒したフランス市民革命には、アメリカ独立戦争に参加した者達の影響も大きく、19 世紀的な近代西欧的価値規範の生成に、重要な環を成したアメリカ独立戦争である。

外輪式蒸気船「クラーモント号」を開発し、1807 年 8 月 17 日にハドソン川で乗客を乗せた試運転に成功して、ガレオン貿易の帆船も蒸気船にとって代わる時代が始まる。ペリーの浦賀沖来航、黒船は 1853 年 7 月 8 日である。

フランスでは、普仏戦争の講和（ナポレオン３世とビスマルクの講和）に反対したパリ市民が蜂起して、世界最初の労働者政権、パリコミューンが 1871 年3月、カール・マルクスは 1883 年没している。この間アメリカは、1861～1865 年南北戦争の後、1898 年　西米戦争、1899 年の米比戦争と次第に世界の列強として、植民地支配、他民族支配の地位を獲得する。

15 世紀という中世末期、日本の戦国時代に相当する歴史時間において、異民族、異文化への残虐な支配を貫徹したスペイン、それに対して 1783 年、自身も植民地 13 州から独立戦争を戦い、一方では黒人奴隷によるプランテーション農業を進めていたアメリカ合衆国である。アメリカ独立戦争を戦った人々は、フランス革命にも影響を与えている。そのアメリカ合衆国のフィリンピン支配が開始する。

スペインとの裏取引で、大きな果実を手にしたアメリカは、スペインの旧教（カトリック）に対して新教（プロテスタント）の国であり、そして 300 年以上に渡るカトリックのスペイン支配をどのように引き継いだのだろうか。

② 米西戦争の顛末→米比戦争へ→アメリカの統治へ

2 千万ドルでスペインからフィリピンを購入したアメリカは、裏ではスペインと取引しながら、フィリピンの革命軍を騙して協力させ、スペインと矢面で戦わしめた。アナギナルドの指揮するフィリピン共和国を、予定通りに決して承認せず、アナギルドらを反乱軍として鎮圧しようとする。

そこで 1899 年（明治 33 年）2 月、アギナルド率いるフィリピン軍はゲリラ戦で抵抗、米比戦争となる。

明治の初頭のフィリピン革命は民族的な理想社会「リガ」を小説「エル・フィリ」の中に展開した中国系のエリート、ホセ・リサール（35 才）を、1892 年大衆の見守る中で銃殺処刑、その影響を受けた革命組織（カプティナン）内の両雄ポニフォシアとアナギルドは対立、アナギルドがポニフォシオ(34 才）とその弟を処刑したのが 1897 年 5 月 8 日、その弟は弱冠何歳であったか、「おにいちゃんどうしよう」とたずねたとか。これを処刑したアナギルトは 1964 年、95 歳の長寿を全うしている。

1901 年、アギナルドはルソン島北部で捕虜となり翌年に敗北、フィリピンの独立は認められず、これからアメリカの統治が続き、1942 年の日本軍の軍政を経て、フィリピンの独立は 1946 年になる。

③　米比戦争の顛末

アナギルドのフィリピンとアメリカの戦い、米比戦争はフィリピン軍の戦死者 12,000 人、アメリカ軍の戦死者 4000 人、フィリピン非戦闘員の犠牲者が 200,000(20 万)という膨大さである。その理由は以下のアメリカの姿勢の結果である。

フィリピン方面のアメリカ軍最高司令官マッカーサー将軍（戦後に日本占領の最高司令官となったダグラス＝マッカーサーの父）は、1900 年に正規軍ではないゲリラは「兵士としての資格に欠け、したがって、もし捕虜となった場合、戦争における兵士の特典を享けるに値しない」と声明を行う。つまり将軍の配下、ジェイコブ＝スミス将軍は「10 歳以上はすべて殺すこと」と簡潔な命令に要約した。

当時、フィラデルフィアの新聞で報じられた現地報告には「アメリカ軍は犬畜生とあまり変わらぬと考えられるフィリピン人の 10 歳以上の男、女、子供、囚人、捕虜、……をすべて殺している。手を挙げて投降してきたゲリラ達も、一時間後には橋の上に立たされて銃殺され、下の水におちて流れていく……」こうした記事は残虐行為を非難するためでなく、文明人が非文明人に対する行為として正当化するために書かれていた。

フィリピンのアメリカ軍指揮官には本土でインディアン＝ファイターとしてコマンチやアパッチと戦っていたが、「一人のインディアンをつかまえるのに 100 人の兵士を要したものだったが、フィリピン人はいっそうたちが悪い（註」と言っている。インディアン戦争からフィリピンへ、さらにベトナムへとつながるのがアメリカの歴史の最暗部との指摘もある。（註 藤永茂『アメリカ・インディアン秘史』1974 朝日選書 p.245-247＞

④ アメリカの統治方式

「遅れたフィリピンの発展にはアメリカの指導が必要」という口実の元に、アメリカはアギナルドらの独立運動は、フィリピンの安定を疎外するものとして、近代兵器で鎮圧、住民の大量虐殺排除の後、タフト（後の大統領）を総督に任命して民政移管、よくぞぶち上げた、「友愛的同化」であった。

1899 年 3 月 4 日マッキンリー大統領はフィリピン行政委員会を任命、まだアナギルドの軍隊は協力的であったが、「フィリピン人は独立は維持できない」というアメリカ側の基本見解、委員長はタフトであった。翌年 3 月 11 日の第二次行政委員会はアメリカの権利の章典を参考にして硬軟両様の政策を敷きつつ、報道統制は厳しく反米闘争をマスコミは隠し、友愛的同化が拡散された。

そして依然続く独立運動、ゲリラを厳しく弾圧、アメリカは，スペインが征服する事のできなかった山地部やイスラム地域までも侵攻、イスラム地域の抵抗は依然強力であったため、15 年のカーペンター=キラム協定までの戦闘、モロ族系の大虐殺、そうしてフィリピン全土を制服する。

１）事実にはならない絶望的希望

タフト、1903 年ローズベルト政権の陸軍長官に就任するため 12 月 23 日マニラを出発する前の演説では「フィリピン人のためのフィリピン建設」であった。しかしジェームズ・ブラウンの手厳しい批判がある。

「占領そのものが、もともとフィリピン人は独立を望んでいない、という予断に基づいて行われた。文民政府は〝友愛的虚構〞のもとに設立された。この政府は、事実ではなく、事実にはならない絶望的希望を、希望であると偽って宣伝していた。」と。

「一方では米軍政の圧迫に反発するイスラム社会に対して、アメリカ・インディアン平定作戦で用いた皆殺し作戦で臨み、1912・13 年のホロ島での凄惨な戦いを最後に、勇敢に戦ったイスラム教徒の抵抗もついに力尽きて、ここに南部イスラム社会は、はじめて北部のキリスト教徒社会と同一の政治支配に組み込まれることとなった。 現在につながるフィリピン

国家の完成である。」と。

2）フィリピン人の国家

しかしながら、「フィリピン人の国」、これは事実には絶対にならない希望とも言うのだが、フィリピン人の希望として拵えられ、熱い希望の「フィリピン人の国」。多くの人々の命をも奪いつくした夢、「フィリピン人の独立国家」、国家とは「想像の産物」でもあるという事を示しているとも言えるのかもしれない。

「人々がどうしてそんなにナショナリズムに熱狂し、執着し、いかなる犠牲をも、ときには自分の命すら捧げる事を厭わないのか」を問題にするときに、国家とは、「政治的イデオロギー」というより以上の、人間を捉える社会文化的現象であるのかもしれない。

それは「想像の産物」「想像の共同体」でもあり、また同時に現実的に国民の前には、税を徴収し、その税をもって行う国家政策の総合体、連合体、集合ともいえようか。

国家とは想像の共同体であり、国民にとっての実体的な姿は、税を徴収し、その税をもって行う、制度政策の体系であろうが、そうであれば、アメリカのフィリピン支配、友愛的同化政策とは、フィリピン国民からの税金をもって、何を成したのか、フィリピン人の命と暮らしに、何ほどの幸せを作ったのであろうか？

想像の共同体でないとして、実体としての共同体であれば、フィリピン社会の暮らし向き、その底上げをどういう税金の徴収、そしてどう使うか、それが実体としての国家、その中身なのではないのだろうか？

3）フィリピン議会開設・アメリカ流民主主義

しかしながら、植民地統治においては、表向きの政策は 1907 年、段階的な最初の自治容認となるフィリピン議会開設、内政におけるフィリピン人への権限移譲を予定、フィリピン人の自治を一部認めた形とするが、決して独立は認めなかった。16 年にはジョーンズ法によって二院制議会が設立されたので，立法権は漸次フィリピン人の手に移り、「アメリカの時代」が到来する。

このアメリカ流民主主義の導入、それを享受したのは，フィリピン議会や地方政府の選挙人資格にもみられるように，男子の有産階級出身のエリートのみであり、フィリピン経済は完全にアメリカに支配されるようになった。

1909 年に制定されたスペイン=オルドリッチ関税法と，その一部を修正した 1913 年の関

税法で，フィリピンとアメリカの間には完全な自由貿易が成立し、結果としてフィリピンの外国貿易は輸出入ともに，全面的にアメリカ市場に依存するようになった。

４）フィリピン・コモンウェルズと「想像の共同体」

この貿易関係を軸に，アメリカ資本は輸出農産物 加工部門，貿易･販売会社，鉱業，林業，電力事業などに進出した。ところが 1929 年に始まった世界恐慌になると、フィリッピン側ではなく、アメリカ側からフィリピン独立の主張が高まった。

それは植民地フィリピン産の安価な製品が本土にもたらされ、アメリカ国内産業を圧迫したため、世界恐慌に苦しむアメリカ産業界からフィリピンを分離してその産品に課税すべきであるという要求である。結果、1935 年 11 月 15 日、アメリカは独立準備政府たるフィリピン・ コモンウェルスを発足せしめた。

この歴史的事実からは、どこまでもフィリピンはアメリカ経済のための道具、アメリカ繁栄のための手段であることがわかる。当時の世相は、第一次大戦中の 1918 年にロシア革命、大恐慌が 1929 年 10/24 の「暗黒の木曜日（Black Thursday）」、29 年にはフィリピン社会党が，30 年にはフィリピン共産党が結成されている。

フィリピン人の国家、この国家は「事実にはならない絶望的希望」だったという。そしてベディクト・アンダーソンは、この地域の比較政治学を通して、「国家は想像の共同体」だという。アギナルドが踊った「フィリピン人の国家」とはそもそも事実ではなく虚構であった、いわく「想像の共同体」でもあろうか。

５）　英語の強制

そしてアメリカは、教育を植民地支配の柱に据えて，全国津々浦々に小学校（無料）を建設し、大学までジョージ･ワシントンの写真が教室の中央に掲げられてのアメリカのカリキュラムに従っての全授業英語を進めた。「友愛的同化」、教育用語としての英語の強制が進められた。

「フィリピンにはタガログ語など、現地の言葉があったが、スペイン統治下ではスペイン語が公用語とされてきた。1898 年、フィリピンを統治することとなったアメリカはすべての教育を英語で行わせた。小学校の教室にはワシントンの肖像がかけられた。・・・・・・マニラ市議会は 22 年に議会用語に英語を採用し、その後 25 年までには裁判や官公庁の採用試験もすべて英語で行われるようになった。」という。

現在もフィリピンは「英語国」だが、教育では「二言語教育」が小学校から行われ、フィリ

ピン語を教育用言語として国語、社会、図工、体育などを教え、英語は英語、数学、理科などで使われている。これは教育現場に大混乱をもたらしており、学力低下や不登校の原因になっているという。

また「首都の代表的な新聞は英語である。そして名のある評論家は英語紙に寄稿する。人々は英語とフィリピン語を自由に相互乗り入れさせる〝タグリッシュ〞で暮らしている。小学校からの二言語教育で英語が国民の日常用語になったわけではなく、それはあくまでお仕着せの言語に留まっている。」という。

歴史的にみると、「英語教育はフィリピン人に劣等感を植え付け、アメリカ文化に憧れさせる「エサ」として提供されてきた。」ともいう。＜鈴木静夫『物語フィリピンの歴史』1997中公新書　p.162,p.186,p.293＞」http://www.y-history.net/appendix/wh0901-039.html

６）新教（プロテスタント）の教育政策

フィリピンの支配者、あるいは宗主国アメリカ社会の主流はWASP（ホワイト・アングロサクソン・プロテスタント）と言われる。全国津々浦々にアメリカの政策で開設された小学校は公的無料、しかし旧宗主国スペイン伝統のカトリック教会側の反発があって、都市部では軌道に乗り難かった。しかし地方では普及が進み、フィリピン人の子供たちに対するプロテスタントのアメリカ的教育、同化教育が進められた。

マックス・ウェーバーが、「プロテスタンティズムと資本主義の精神」において明らかにした心的構造を有する勤勉、刻苦の国民の量産が期待されたのでもあろうか。アメリカ社会の主流、エスタブリッシュへと続く理想が掲げられたのでもあろうか。

現世の成功こそが、神の約束事の現れ、憑かれたように勤勉な労働をもって、その神との間の契約の履行、その確信的な労働、そして祈る人々が求められたのであろうか。アメリカの良き市民となすべく、アメリカ式の教育制度を敷いた。

※ところで先日、イスラム教徒が自分の宗教について、その意味合いをインタヴュ―されて言っていたテレビ番組を見たのだが、宗教とは社会生活上の倫理、道徳のフィルターみたいなそうである。みんなで日に 5 回も地にひれ伏して礼拝する人々においては、みんな揃ってそうなるのかなあと思った・・・

プロテスタンティズムは、近代的な自我を呼び起こした、宗教活動というべきか、現世の富を肯定、神との契約、選ばれた民である事の確認であるかの如く、地上そして天上の富を、職業としての商売をもって、蓄財に邁進する、ここに至上の価値を置くことができたもので

もあろうか。

7）アメリカ流民主主義的な職業的営み

貿易関係を軸に，アメリカ資本は輸出農産物 加工部門，貿易･販売会社，鉱業，林業，電力事業などに進出した。

この第一次大戦の前に敷かれたアメリカとフィリピンの関係、公民教育を英語で強制するアメリカ、そして一方では独立運動の弾圧、住民の大虐殺。このパラドックスの意味あいこそが、現下アメリカ市場原理主義に覆われたアメリカ政権の行う、マスメディア戦略の「虚と実」を映し出すのではないだろうか。

騙しと思い込みを誘う、巧妙な権謀術数、「表向きの理屈と現実？」・「価値と事実？」・「制度運用と規範・理念のずれ込み？」、その結果の、大衆洗脳（思い込み、勘違い）などと、時間軸を廻す手法、そのルーツのような史実ではないだろうか。

現下世界のマスコミからは「ならず者扱い」のフィリピンのロドリゴ・ドゥテルテ大統領の言葉の裏側に横たわる、史実、歴史的経過を、振り返る意味も大きいのだろうか。

Ⅲ　日本軍の侵攻と戦後のフィリピン

①　日本軍の侵攻

1941 年 12 月、日本軍の真珠湾攻撃、開戦直後から日本軍はフィリピン侵攻を開始し、アメリカ軍のマッカーサー司令部の置かれたマニラ、イントラムロスのサンチャゴ要塞に対する空爆を行った。日本側は１月２日にマニラ侵入、激しい攻防戦の結果マニラは陥落する。

その時マッカーサーは、有名な“I shall return.” の言葉を残してオーストラリアに撤退したが、その言葉通り、1945 年１月マニラに総攻撃を加え、山下奉文を司令官とする日本陸軍はマニラを撤退した。

陸軍は「マニラ市を戦火に曝すのは、伝統ある文化施設を灰燼に帰し、無辜の住民を塗炭の苦しみに陥れるもの」として撤退したが、「イントラムロス」とその付近には海軍陸戦隊と、戦闘要員として現地召集された在留邦人の残留部隊約１万が残されていたと。

フィリピン軍司令官に見捨てられた彼らは満足な武器もなく、竹槍なども武器にした。アメリカ軍の侵攻にあわせてフィリピン人ゲリラも各所で蜂起し、２月９日前後に壮絶な市街戦、２月２４日に最後のサンチャゴ要塞が陥落まで、多数のマニラ市民が犠牲となった。

特にサンチャゴ要塞では地下牢にアメリカ人、フィリピン人、スペイン人、中国人などの捕虜が収容されていたが、日本軍憲兵隊は要塞から撤退する際に囚人を焼き殺し、さらに海水面より低い地下牢が高潮で水没して捕虜が溺死するのを放置したことは、戦後の長い間、マニラでの日本に対する悪感情の原因であるという。

② フィリピンの戦後史

1） アメリカからの独立

1946 年 7 月 4 日、フィリピンはアメリカ合衆国から独立、フィリピン共和国となった。初代大統領ロハスはアメリカの意を受けて共産党系武装集団フクバラハップ（フク団）掃討に全力を挙げたが、48 年心臓発作で急死、次のキリノ大統領はフク団との和平を進めた。その後、国防長官マグサイサイは「アメとムチ」を使ってフクバラハップを鎮圧することに成功、人気を博して 1953 年に大統領に当選し、土地改革などを行った。

マグサイサイは、政治における清廉潔白さ、プラグマティックな理想主義などから人気を得たが、1957 年 3 月 17 日に航空機事故で 49 歳で死去した。この間 1951 年にはアメリカとの間で米比相互防衛条約を締結し、アジアにおける対共産圏包囲網の一員に加わり、アメリカのアジア戦略の一翼となった。

続くマカパガル大統領、そして 1965 年に就任したマルコス・イメルダ夫妻は、利権を操り、外国資本と結びついた開発を推し進め（開発独裁）、民主化を求める運動を戒厳令によって弾圧し長期政権を維持した。大統領の三選を禁止していた憲法を戒厳令の下で改定して、74 年に新憲法の下で大統領三選を果たし、外国資本の導入による工業化政策を推進、その具体的な施策として輸出加工区の設置で、原料輸入・製品輸出を非課税にすることで外資導入を促した。

2） ピープルパワー革命

しかし 1983 年に政敵ベニグノ＝アキノ暗殺事件を機に、経済危機も相まって一気に独裁反対の声が強まり、1986 年の大統領選挙でアキノ未亡人が当選すると、マルコスはその当選を無効としようとして工作したがかえって民衆の反発をうけた。

マニラ市内で市民が結集、軍やカトリック教会も反マルコスで一致したためマルコスは夫人と共にアメリカに亡命、このピープルパワー革命と言われた民主化が実現してアキノ大統領が出現した。

以後、アキノ政権のもとで民主化が進められ、大統領は 1992 年にラモス、1995 年にエストラダ、2001 年にアロヨといずれも民主的な選挙で選出されたが、なお貧困層の拡大、イ

スラーム系の分離運動などが続いている。

③　ドゥテルテ大統領への支持

2016 年 5 月に行われた大統領選挙で、元ダバオ市長のドゥテルテは圧勝したが、特に地盤である南部やマニラ首都圏などで高い得票率を誇った。加えてもう一つ、彼が 72%を超えるダントツの得票率を誇った地域があった。それが、海外だという。

フィリピンは国内経済の状況から、国民は世界各国で多くの人々が働いて外貨を稼いでいる。英語に堪能な人々が多い事情も有利に働き、国民の 1 割近い 1000 万人以上が海外で暮らし、外貨送金が国内の経済を支える「出稼ぎ大国」との異名もある。

スペイン、アメリカの支配を 400 年以上に渡って生きた人々、宗主国の富、そして今では国際的な大企業、グローバル企業の利益のための国内資源、低賃金労働力という社会となっている。海外に出ていながら「本当は母国フィリピンで暮らしたいから」が、支持の理由だという。

日本同様、フィリピン国内にはアメリカ軍基地があり、1992 年に一度撤退した。しかし、2014 年に結ばれた「米比防衛協力強化協定」に基づいて、2016 年 3 月にはフィリピン国内の 5 基地を共同使用する合意が結ばれた。中国の台頭に対抗するアメリカ側の意向が反映されたとみられており、フィリピン側はその見返りに、アメリカに防衛のための資金援助を求めた。

こうした動きから、ベニグノ・アキノ前大統領は「アメリカの操り人形」と度々批判されてきたが、9 月 12 日の演説でドゥテルテ氏は「アメリカ軍は出て行け」と発言している。

１）　マスメディア情報の偏り

シンガポールの建設会社でエンジニアとして働くテリーは、「世界中のメディアは誇張しすぎ」と憤る。

「ドラッグや汚職との戦いで彼は次々と敵を作っています。しかし、これまで甘い汁を吸ってきた大企業や著名人が、色んな手段を利用して彼の評判を貶めている可能性は否定できない。不正確なニュースが流れ続けるからこそ、私は彼らの情報操作が及ばない SNS で情報収集できる時代に感謝しているんです」。

彼女もドラッグ取り締まりについての手腕を評価している。「彼のアグレッシブな取り締まりだけが話題になっている。でもその裏で、60 万人もの犯罪者が自首した事実はあまり

知られていない」。ドゥテルテ氏は就任前に、薬物犯罪者を厳しく取り締まると宣言。刑務所には自首する人々の行列ができた。こうした厳しい取り締まりが治安改善に役立つと考えている。

ドゥテルテ大統領を、世界のマスコミは酷評するが、彼の言葉の背後の歴史、スペイン、現アメリカの支配の過酷さがある。その上、現在では情報操作、騙しに近い情報が拡散されている。フィリピンという発展途上国側の国民生活、文化、命よりも、宗主国の経済、グローバル企業の利益が優先されているのか、従わない者達への残虐も、歴史的事実として深く、重く重なっているともいえようか？

２）　21 世紀のマスメディア

どのような理想も、国家像も、理念も正義も、いかようにも拵える事は出来るのが、マスメディアであろうか。しかしその正義、その理想をどう実現するのか、国家は想像の共同体だとしても、国家は税金を徴収し、実現すべき国民生活の安定、幸せを作る機関、実体としての国家は、今どう動いているのだろうか？

フィリピンでは、白人列強国のための道具のように扱われた植民地住民であって、宗主国に背くことは死を意味していた。現在の日本はどうだろうか？アメリカの言う正義の為、一番危険な戦場で下働きを要請される自衛隊であろうか？そして何よりも、国籍不明の企業へ税金を流すにあたって、都合の良い「想像の共同体」でもあろうか。

それを正義として拵えるのが、マスメディアを支配する集団であろう。世界のマスコミに、ドゥテルテ大統領と双璧とされる乱暴者、トランプ大統領、その腰巾着安倍晋三総理にも見えるけれど。

３）　アメリカの戦略に抗して

植民地の統治では、国土も、国民の労働も、全ては本国経済のための道具であった。グローバル経済が席巻する今日では、国家を支配する者たちは、グローバル企業の代弁者となっている。国家とはグローバル企業のために、国民から税金を徴収し、想像上の共同体として国民の利益のように勘違いさせながら、グローバル企業に日本の産業育成と言って、税金を流しこむ事ができるのかも。

その為の、マスメディアのコントロールと、税金を横流しするための人材育成、グローバル企業に同調する政治家が育成中でない事を祈る？

ODA、海外への援助は、なぜあんなに大きい？ 海外展開の企業への税の還流は、国民生活

に還元されるのだろうか？私達は重税で苦しむだけ、雇用は海外であろう。何故グローバル企業はあんな大きな資金を、税金で支援される事ができるのだろうか？

トランプ新大統領は「あまりにも長い間、ワシントンにいる一部の人たちだけが、政府から利益や恩恵を受けてきました。その代償を払ったのは国民です。ワシントンは繁栄しましたが、国民はその富を共有できませんでした。」と。

そして「政治家は潤いましたが、職は失われ、工場は閉鎖されました。権力層は自分たちを守りましたが、アメリカ市民を守りませんでした。彼らの勝利は、皆さんの勝利ではありませんでした。彼らは首都ワシントンで祝福しましたが、アメリカ全土で苦しんでいる家族への祝福は、ほとんどありませんでした。」とは、トランプ大統領の言であった。

４）　ソ連邦崩壊後の日本の立場

日本はソ連邦が存在している限り、ソ連邦の真下に居て、アメリカに優遇されたのであろうか。その地政学上の位置が「物を言った」のであろうか。そのために経済の順調回復は許されていた？それは西ドイツも同じであったろうか。

ゴルバチョフ政権（1985/3～1991/12）が始まってプラザ合意（1985/9）、ベルリンの壁崩壊が 1989/11/9、ソ連邦崩壊が 1991/12、日本のバブルは 1991/3 から 1993/10 まで、プラザ合意 1 年後に 1＄（ドル）は 250 円から 150 円になった。金あまりの不動産価格高騰、はじけて失われた 10 年が始まる。

ソ連邦崩壊後の日本は、優遇される条件を失い、失われた 20 年に落とされたのかもしれない。異文化、異民族、異国家ならず、自国民さえ、企業利益の道具とする、グローバル企業の論理に迎合するのが、アメリカ市場原理主義の意を汲む、クリントン・オバマであろうか。そして敗戦国日本への指令塔、国内司令部は？小泉規制緩和後の日本、今その二世美男の進次郎を、マスコミとアメリカサイドが持ち上げている？のだが。

ソ連邦崩壊後は、沢山の富を吸い上げられつつある日本ではないだろうか。失われた 20 年とは何であったのか？

５）　美濃加茂市長選挙を応援しよう

この動きの日本側の司令部、最高裁事務総局の動きに対して、目を見開き、次第に事務総局を制御する事が大切では無いだろうか。フィリピンの歴史は、フィリピン人内部の同胞内部の争い、そしてエリートの宗主国への迎合によって、国民の苦悩を長引かせてきている。

今私達は、右翼、左翼を問わず、過酷になり勝る市場原理主義的なアメリカの意を汲む集団に対して、その動きを差し止めないならば、フィリピンのような苦しみが待っているのではないだろうか。ホセ・リサール（35 才）・ポニフォシオ(34 才）は処刑された。

抵抗の核になりそうな若者を潰しにかかる最高裁事務総局であろう。美濃加茂市長選が行われる。愚かな男が立候補を名乗りでている。後ろの糸はどうなのか？アメリカ市場原理主義者は、自国民さえ搾取して顧みない政治、それがトランプ大統領の演説から伝わってくる。

アメリカを始めとする各国グローバル企業の利益のため、マスコミをコントロールして、国民を道具として扱う集団の意のままに、この国を動かす集団、最高裁事務総局の悪だくみに抗していく時ではないだろうか。騙されない事であろう。

国民の生活を守るための、政治刷新の核になる青年と見ての、美濃加茂市長（32 歳）への攻撃であろうか。詐欺師と同道する裁判所である。私達は、この国の未来の為、若い人々の貧困化を防ぐため、国民の生活のため、自分達の税金を自分達の為に使うため、アメリカからの日本の真の独立を果たすことであろう。

日本中がこの選挙を見守り、国の未来をかけて、不正を働く裁判所に抗議である。美濃加茂市長の清々しさに、みんなして応援しなければならない時である。2017/01/22